

授業「キャンプ実習」に関する研究(2)

—2カ年の基礎研究比較—

中村 哲士, 保井 俊英, 會田 宏, 小柳 好生
田中 繁宏, 永戸 久美, 四元 美帆, 野老 稔
(武庫川女子大学文学部健康・スポーツ科学科)

Research on the Lesson of “Camp training”(2)

—Comparison of Basic Researches into Two Years—

Tetsushi Nakamura, Toshihide Yasui, Hiroshi Aida, Yoshio Koyanagi,
Shigehiro Tanaka, Kumi Nagato, Miho Yotsumoto, Minoru Tokoro

*Department of, Health and Sports, School of Letters
Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663-8558, Japan*

Abstract

This research of the second stage executed mainly the comparison of the basic researches into two years. The chief purpose was clarification of a universal part of two years.

The results were summarized as follows:

1. The reason for participation and the target of acquisition were “Cheap expenditure”, “Course credit”, “Basic experience in natural environment” and “Sharing of enjoy a pleasant time with friend”.
2. “Aggressiveness to the preparation”, “Effective action of the orientation etc.”, “Lack of prior study”, “Uniformity of environment adaptation power”, and “Height of the expectation” were observed as well as last year.
3. The level of student's leadership was guidance of life in the outdoors activity.
4. The factor analysis has extracted the following six factors. “Accomplishment of obligation and responsibility”, “Human interaction and self-satisfaction”, “Impartiality and democracy”, “Health condition”, “The mind and body's stability” and “Appropriate practice”.
5. The method of the participation of students in the outdoors activity has changed independently and positively. The practice exerted the good influence on students' “Standpoint and attitude”. The practice was effective in understanding and goodwill to nature.

緒言

本学科は、スポーツ指導者の養成機関である。指導力の向上と自己の能力開発については、在学生・卒業生を問わず、常に実践できるような能力を学科目内で身につけさせておく使命がある。学外実習につい

ても、個人の体験だけを重視した科目ではなく、学生の能力向上のための授業であることが必然である。そのため、実習生の能力変化を正確かつ適切に測定できる評価方法を構築し、常時客観的に追求できる調査・研究の蓄積が必要であると判断し本研究に着手した¹⁾。

一連の研究では、養成課程に存在する組織、指導者、プログラム、施設・設備、実習生に関わる質的向上の問題解決を研究の目的とし、その向上や達成レベルを正確に評価・分析できるよう①診断的評価方法、②形成的評価方法、③総合的評価方法の3点について、本学科に最も適した形で創出することを目標とした²⁾。

よって、第一段階となる昨年の研究は、「参加者の意識・行動・学習・達成レベル」に焦点をあて、参加者の自信や指導技術・能力の向上に、現在の実習の実施方法でどの程度の貢献量があるものなのかの基礎的資料を得ることを目標に実施し³⁾、第二段階となる今年の研究においては、2ヶ年の基礎的資料収集による比較検討から、2実習間に存在する普遍部分の解明を最大の目標として実施した。

方 法

1. 実習の概要と分析の対象

(1) 実習の概要

本年度の実習は、目的・目標、システム、担当指導教員、場所、期間等のほぼ全てを昨年同様⁴⁾とし、時期のみ学年暦の関係から7月6日から7月10日の4泊5日に変更して実施された(Table 1.)。

Table 1. キャンプ実習の日程・日課

TIME	1日	2日		3日		4日		5日
	出発準備	起床		起床		起床		起床
7:00	学生集合	朝の集い		朝の集い		朝の集い		朝の集い
8:00	大学出発	朝食		朝食		朝食		朝食
9:00		Aグループ	Bグループ	Aグループ	Bグループ	Aグループ	Bグループ	奉仕活動
10:00			O・L 学習会	スポーツ 活動	ロープワーク ハンドクラフト	O・L 学習会		閉講式
11:00								現地出発
12:00	昼食	登山 (昼食)		昼食			登山 (昼食)	昼食
13:00			O・L (昼食)	ロープワーク ハンドクラフト	スポーツ 活動	O・L (昼食)		
14:00	現地到着			自然探素				
15:00	開講式			自由行動				
16:00	環境整備							大学到着
17:00	夕食	夕食	入浴	夕食	入浴	入浴	夕食	備品整理
18:00	入浴	入浴	夕食	入浴	夕食	夕食	入浴	解散
19:00	オリエンテーション	星座観察		歌唱・フォークダンス		キャンプファイヤー		
20:00								
21:00	班長会議	班長会議		班長会議		班長会議		
22:00	消燈	消燈		消燈		消燈		

(2) 分析の対象

分析の対象者は、大学・短大ともに2年生で開講されている「キャンプ実習」という選択必修科目を、平成16年度に履修した119名の学生である。そのうち有効回答として今回の研究に採用したのは、欠席、無効回答を除く107名であった。

2. 調査の内容と方法

(1) 調査内容

調査内容は昨年度とまったく同様とし、[事前調査]と[事後調査]の2回を計画した⁵⁾。

(2) 調査方法

調査方法も昨年同様、集合調査方法を用いた記名方式で実施した⁶⁾。

3. 分析の内容と方法

今回の研究は、昨年度実施した研究との比較研究である。特に、実施年度や参加学生に関わらず、実習自体から得られる純粋な貢献量を測定したい。そのため、「参加者の意識・行動・学習・達成レベル」に焦点をあてた分析の内容や方法については、昨年度と全く同一にして実施した⁷⁾。

結果と考察

1. 参加理由と習得目標

今年の実習参加理由についても、昨年同様「参加料金の安さ」「単位の関係」「友人との交流」の3項目が上位回答項目となり、全体的回答傾向も非常に似かよっていた(Table 2.)。期待するプログラムでは、「野外調理」「星座観察」「キャンプファイヤー」「登山」が昨年同様上位回答項目となったが、30%以上の回答率を得た項目は、「星座観察」と「野外調理」であった(Table 3.)。

今年の実習参加学生も、参加料金の安さと単位取得を優先した実習選択をし、日常、擬似的にでも体験することが困難な活動をとおして、友人と楽しみを共有したいとする立場をとっているようで、何かを達成したい、技術を習得したいというような意欲についてはうかがい取れなかった。

キャンプ実習に対する期待と具体的な習得目標についても回答を求めた。期待することがらについては、「思い出づくり」「楽しさの体験」「友達との人間関係」が上位回答項目であり、回答率で50%を超え、「指導力の向上」は、今年も下位にランキングされ、昨年同様回答率は20%を下回った(Table 4.)。また、習得目標についても、「基本技術」「共同生活のあり方」「安全な方法」「ルール・マナー」が上位となり、「指導方法」「計画・実施方法」は、今年も低い回答率となった(Table 5.)。

本年度参加の学生たちも、キャンプ実習を何かを習得しなければならない授業、あるいは、自己の能力

Table 2. 参加の理由 N=107

項目	%
1. 参加料金が安い	54.21
2. 単位の関係上	41.12
3. 友達といきたかった	35.51
4. キャンプが好き	23.36
5. キャンピングの知識や技術の向上	14.02
6. 新たな友達ができそうだった	12.15
7. キャンピングの指導力向上	10.28
8. 学科の実習で安心	8.41
9. キャンプをしたことがない	7.48
10. その他	5.61
11. 大学教員の引率・指導	0.93
12. 不明	0.00

Table 3. 期待のプログラム N=107

項目	%
1. 星座観察	47.66
2. 野外調理	41.12
3. キャンプファイヤー	29.91
4. 登山	18.69
5. スポーツ活動	18.69
6. オリエンテーリング	14.95
7. テントの設営・撤収	11.21
8. ロープワーク	11.21
9. ハンドクラフト	10.28
10. フォークダンス	10.28
11. 朝の集い	6.54
12. 歌唱	2.80
13. 開・閉講式	1.87
14. 奉仕活動	0.93
15. その他	0.93
16. 不明	0.93

Table 4. 参加の期待 N=107

項	目	%
1.	思い出づくり	73.83
2.	キャンプの楽しさを体験	55.14
3.	友達との人間関係づくり	55.14
4.	自然とのふれあい体験	48.60
5.	キャンプの知識・技術の習得	42.06
6.	キャンプの指導力の向上	19.63
7.	その他	1.87
8.	不明	0.00

Table 5. 習得目標 N=107

項	目	%
1.	基本的なキャンピング技術	58.88
2.	野外における適切な共同生活のあり方	41.12
3.	安全なキャンピングの方法	37.38
4.	自然と共生するためのルール・マナー	29.91
5.	キャンピングの指導方法	21.50
6.	各プログラムの計画・実施方法	13.08
7.	その他	0.93
8.	不明	0.93

の一部を向上させなければならぬ授業などとは捉えていないことが明らかとなった。2ヶ年を通じ、実習経費が安価であることを第一条件に、単位取得と基本的体験に参加目標を置き、自然が豊富な環境でしか体験できないことをとおして、友人と時や楽しさを共有したいという傾向にあることがはっきりとした。達成レベルの高い実習展開を認識させる事前教育の必要性が、2ヶ年ともに強く指摘される。

2. 経験・技術と事前学習の自己評価

過去の経験については、学校関係の研修、家族とのキャンプ経験という回答が昨年同様に多いが、今年に限っては、友人とのキャンプ経験が増えている(Table 6.)。キャンプ技術の自己評価では、野外調理の技術は半数以上のものが持ち合わせていると判断しているが、昨年の回答率よりかなり低下していることが明らかとなった(Table 7.)。

Table 6. キャンプ経験 N=107

項	目	%
1.	高等学校までの林間学校で経験	59.81
2.	大学の宿泊研修で経験	58.88
3.	家族とのキャンプ経験	28.97
4.	友人とのキャンプ経験	13.08
5.	初めて	11.21
6.	地域でのキャンプ経験	9.35
7.	YMCA などでのキャンプ経験	3.74
8.	ガールスカウトでの経験	2.80
9.	その他	2.80
10.	キャンプのリーダーを経験	0.93
11.	キャンプ関係の団体に所属	0.00
12.	不明	0.00

Table 7. キャンプ技術 N=107

項	目	%
1.	飯盒(コッヘル)炊飯	57.01
2.	野外調理	52.34
3.	マキでの火おこし	41.12
4.	刃物の安全な使用	26.17
5.	テントの設営・撤収	23.36
6.	かまど造り	14.95
7.	不明	14.02
8.	ロープワーク	0.93
9.	天気図・気象予測	0.93
10.	食用植物の採取と調理	0.00
11.	方位・距離・地図	0.00

結果から、本学の野外活動系の宿泊研修、小・中・高等学校、地域または家族での経験をあわせると、少なくとも1人2~3回程度のキャンプ経験があり、野外調理に必要な基礎技術は誰しもが体得していると、2ヶ年ともに判断できそうである。

事前の準備や学習の量、オリエンテーションや要項等の作用、適応能力や期待の程度についての回答からは、個人準備・協同準備に際しての積極性、オリエンテーションや実習要項の有効作用、知識・技術や役割・研究などに関する事前の学習や準備の不足、環境適応能力の一様性、実習直前の期待度の高さなどがうかがえ、昨年同様の傾向となった(Table 8.)。

2ヶ年の検討から、キャンプに対する知識・技術やキャンプ実習における役割・研究などに関する事前の学習や準備の不足は否めないことが判明した。発展的に実習を考えるならば、学期期間中の授業科目に関

連科目が存在しない実習，とりわけキャンプ実習やスノースポーツ実習については，事前学習に関する方法の再考と時間の確保が急務な課題と指摘されよう。

Table 8. 事前の自己評価 N=107(%)

項 目	5	4	3	2	1	不明
1. 準備段階における班員とのコミュニケーション	18.69	47.66	23.36	9.35	0.93	0.00
2. 個人の知識や技術に関する事前学習	0.93	3.74	38.32	35.51	21.50	0.00
3. 役割担当に関する事前の学習や準備	2.80	14.95	37.38	29.91	14.95	0.00
4. 個人的用具の準備	14.95	31.78	35.51	14.95	2.80	0.00
5. オリエンテーションや実習要項の有効作用	14.95	38.32	34.58	11.21	0.93	0.00
6. 個人の環境変化の対する適応能力	10.28	21.50	56.07	9.35	2.80	0.00
7. キャンプ実習直前の期待	25.23	23.36	34.58	11.21	5.61	0.00

※ 5=とても高次，4=やや高次，3=平均的，2=やや低次，1=とても低次

3. 実行力と指導力の獲得

実習で行われた各プログラムについて，自分自身の実行力と指導力に関して自己評価をしてもらった。評価は，本年も「とても自信がついた」から「まったく自信がない」までの5段階評価とした(Table 9.)。

Table 9. 実行力と指導力の自己評価 N=107

項 目	実行力		指導力		T	P
	Mean	S.D.	Mean	S.D.		
5. 野外調理	4.22	0.79	4.15	0.79	1.338	
4. 飯盒炊飯	4.18	0.83	4.17	0.85	0.179	
3. 火おこしとマキの組み方	4.09	0.95	4.08	0.85	0.185	
13. スポーツ活動	4.08	0.77	4.01	0.84	1.237	
8. 登山	4.03	0.79	3.79	0.90	3.146	**
6. 刃物(ナイフ・ナタ等)の使用	4.01	0.97	3.87	0.93	2.135	*
7. 朝の集い	3.97	0.77	3.83	0.81	2.228	*
25. 奉仕活動	3.81	0.78	3.73	0.89	1.069	
12. ハンドクラフト	3.79	0.83	3.79	0.93	0.000	
11. ロープ結策法	3.79	0.88	3.65	0.95	2.015	*
2. テントの管理	3.78	0.74	3.64	0.76	2.053	*
19. 方位の判定	3.78	1.01	3.60	1.05	2.044	*
9. オリエンテーリング	3.76	0.94	3.64	0.96	1.382	
14. 歌唱	3.73	0.84	3.59	0.87	1.825	*
16. キャンプファイヤー	3.67	0.89	3.57	0.87	1.291	
15. フォークダンス	3.59	0.88	3.58	0.89	0.142	
17. 野外ゲーム	3.59	0.86	3.56	0.81	0.317	
1. テントの設営・撤収	3.56	0.70	3.50	0.73	1.153	
21. 地図	3.54	1.02	3.19	0.93	4.862	***
18. スタンツ(寸劇)	3.52	0.96	3.35	0.92	2.204	*
24. 自然観察	3.50	0.89	3.33	0.88	2.409	**
20. 距離の測定	3.41	0.93	3.25	0.94	2.144	*
10. 星座観察	3.13	1.04	3.19	0.98	-0.800	
22. 天気図	2.77	0.89	2.82	0.89	-0.948	
23. 気象予測	2.76	0.93	2.76	0.88	0.000	

*:P<0.05 ** :P<0.01 ***:P<0.001

昨年同様上位 10 項目に着目すると、今年も実行力・指導力ともに上位にランクされた 10 項目は同一であった。昨年の上位 10 項目と比較しても、「野外調理」「飯盒炊飯」「火おこしとマキの組み方」「スポーツ活動」「登山」「刃物(ナイフ・ナタ等)の使用」「朝の集い」「奉仕活動」の 8 項目で一致した。8 項目は今年の場合上位から 8 項目であり、過去に経験した可能性が高いプログラムに集中した。

平均値の差の比較からは、指導力の評価が実行力の評価を上回った項目は、「星座観察」「天気図」の 2 項目であったが、有意差は認められず、その他の項目はすべて指導力の評価が下回っていることが明らかとなった。

昨年と比較して平均値に向上傾向が認められはするが、実行力・指導力のいずれに関しても得手不得手の順位に大きな差はないと判断される結果となった。現在の実行力・指導力の程度から判断するなら、班を担当し生活指導を行うインストラクター程度の活動は可能ではあるが、各プログラムを主任となって運営・指導していけるほどの実行力・指導力を持つにまでは至っていないといえよう。昨年同様、体験だけではなかなか得られない知識や自信を如何に向上させるかが、現キャンプ実習の課題と指摘されよう。

4. 満足感・達成感を構成する要因

満足感・達成感を構成する要因について因子分析を行ない検討した。

分析は、主因子法を用い、Kaiser の正規化を伴うバリマックス回転実施の後、因子構造を得た。因子数の決定は、基本的に因子の固有値が 1.0 以上のものとしつつ、スクリーカーブを参考に行なった結果、昨年と同様に 6 因子を得ることができた(Table 10.)。因子の解釈および命名は、回転後の因子負荷量が 0.5 以上の項目に着目し、松田の研究⁸⁾と昨年の研究⁹⁾を参考に行った。

第 1 因子は、14.「積極的に協力して仕事をしたか」、3.「参加者に担当プログラムの計画を考えさせたか」、21.「担当プログラムに創意工夫がなされたか」、15.「創意工夫して、仕事をなし遂げたか」、18.「責任感と義務遂行力は高かったか」、22.「共同生活者の清潔・整頓に気を配れたか」、20.「参加者と接触の機会は多かったか」、2.「専門的な知識と技能は発揮されたか」、9.「積極的に指導しあったか」、24.「積極的に話し合いに参加し発言できたか」、1.「グループ生活によく適応したか」、10.「指導力は十分発揮されたか」、4.「身のまわりの清潔・整頓は良く行われたか」、5.「定められた規則が守られたか」、12.「担当プログラムに興味と欲求は満たされたか」などの項目の因子負荷量大きい。因子を代表する項目内の主要なキーワードは、「積極的」「担当プログラム」「責任」「義務」「遂行」「清潔・整頓」「共同生活」「指導」「発揮」「規則」などであり、これらから、共同生活の中で自分に課せられた担当や役割をよく認識し、義務や責任をより高く遂行しようとする姿勢がうかがえる。よって、この因子を「義務や責任の遂行」と命名した。

第 2 因子は、47.「野外活動は楽しかったか」、33.「野外活動は健康のためよかったと思うか」、48.「日数や時期はよかったか」、50.「機会があればまた参加したいと思うか」、49.「実習は得るところが大きかったか」、46.「これからもやりたいことが見つかったか」、34.「友人と協力することができたか」、43.「諸活動は自分の身体に無理なく行えたか」、23.「友人と仲よく生活できたか」、11.「新しい友人ができたか」などの項目の因子負荷量大きい。因子を代表する項目から、自分自身の満足感の高まりや友人とのコミュニケーションの深まりや広がりの様子がうかがえることから、この因子を「交流と自己の満足感」と命名した。

第 3 因子は、39.「担当プログラムは民主的に運営されたか」、40.「民主的な生活が実行されたか」、38.「参加者の保健安全面に十分留意したか」、37.「公平で親切であったか」、31.「野外活動の一般的知識を得たか」などの項目の因子負荷量大きい。学生主導型であることや平等性が強く感じられることから、「公平と民主」と命名した。

第 4 因子は、25.「実習期間中の健康状態はよかったか」、16.「実習中病気をしなかったか」の項目の因子負荷量大きい。明らかに自分自身の健康状態のことを指し示す事柄であることから、「自己の健康状態」と命名した。

第 5 因子は、26.「実習中けがをしなかったか」、27.「自然観察は楽しかったか」の項目の因子負荷量大きい。この 2 項目だけでは解釈することが困難であったため、2 項目に続き比較的因子負荷量の高い項目にも着目してみた。「食べ物の好き嫌い」「参加者の平等」「共同精神」「食欲」などのキーワードが浮かび上

Table 10. 達成感の構成因子

N=107

質問項目	F1	F2	F3	F4	F5	F6	Mean	S.D.
14. 積極的に協力して仕事をしたか	0.715	0.254	0.138	0.267	-0.216	-0.029	4.30	0.78
3. 参加者に担当プログラムの計画を考えさせたか	0.702	0.127	0.096	-0.091	-0.112	0.281	3.70	0.85
21. 担当プログラムに創意工夫がなされたか	0.693	0.273	0.240	0.048	-0.068	0.139	3.90	0.87
15. 創意工夫して、仕事をなし遂げたか	0.644	0.124	0.091	0.296	-0.257	-0.028	4.33	0.83
18. 責任感と義務遂行力は高かったか	0.641	0.349	0.117	0.302	-0.195	-0.056	4.17	0.79
22. 共同生活者の清潔・整頓に気を配れたか	0.606	0.265	0.340	0.147	-0.074	-0.005	4.04	0.78
20. 参加者と接触の機会は多かったか	0.592	0.241	0.199	0.215	-0.070	-0.009	3.89	1.02
2. 専門的な知識と技能は発揮されたか	0.579	0.265	0.258	-0.044	-0.025	0.135	3.78	0.81
9. 積極的に指導しあったか	0.575	0.289	0.205	0.212	0.149	0.249	3.72	0.86
24. 積極的に話し合いに参加し発言できたか	0.570	0.439	0.289	0.284	-0.002	0.147	3.93	0.90
1. グループ生活によく適応したか	0.568	0.405	0.206	0.272	0.064	0.095	4.07	0.81
10. 指導力は十分発揮されたか	0.561	0.313	0.162	0.024	0.142	0.072	3.52	0.81
4. 身のまわりの清潔・整頓は良く行われたか	0.533	-0.019	0.191	0.140	-0.077	0.156	3.98	0.76
5. 定められた規則が守られたか	0.528	0.015	0.125	0.021	-0.125	0.090	3.76	0.85
12. 担当プログラムに興味と欲求は満たされたか	0.516	0.387	0.118	0.109	-0.164	0.232	3.80	1.00
47. 野外活動は楽しかったか	0.243	0.810	0.181	-0.002	-0.095	0.123	4.28	0.84
33. 野外活動は健康のためよかったと思うか	0.008	0.746	0.238	0.028	-0.203	0.091	4.10	0.98
48. 日数や時期はよかったか	0.074	0.716	0.222	0.084	-0.085	0.306	3.92	1.03
50. 機会があればまた参加したいと思うか	0.228	0.680	0.130	-0.041	0.008	0.212	3.64	1.19
49. 実習は得るところが大きかったか	0.346	0.666	0.165	0.182	-0.109	0.101	4.34	0.89
46. これからもやりたいことが見つかったか	0.368	0.657	0.061	-0.119	-0.090	0.131	3.80	0.92
34. 友人と協力することができたか	0.341	0.638	0.280	0.364	-0.159	0.066	4.33	0.84
43. 諸活動は自分の身体に無理なく行えたか	0.187	0.626	0.190	0.257	-0.152	0.232	4.06	0.99
23. 友人と仲よく生活できたか	0.305	0.622	0.234	0.447	0.022	0.183	4.21	0.89
11. 新しい友人ができたか	0.355	0.501	0.021	0.148	-0.184	-0.053	4.13	0.91
39. 担当プログラムは民主的に運営されたか	0.400	0.207	0.725	0.170	-0.056	0.123	4.04	0.85
40. 民主的な生活が実行されたか	0.375	0.329	0.709	0.132	-0.120	0.147	4.13	0.80
38. 参加者の保健安全面に十分留意したか	0.349	0.312	0.576	0.071	-0.143	0.193	3.96	0.78
37. 公平で親切であったか	0.415	0.332	0.520	0.148	-0.170	0.290	3.96	0.86
31. 野外活動の一般的知識を得たか	0.330	0.349	0.503	0.184	-0.264	-0.031	4.22	0.73
25. 実習期間中の健康状態はよかったか	0.100	0.278	0.075	0.760	-0.088	0.273	4.09	1.05
16. 実習中病気をしなかったか	0.149	-0.106	0.085	0.726	-0.100	0.042	4.42	0.98
26. 実習中けがをしなかったか	0.038	0.066	0.135	0.317	-0.732	0.118	4.44	1.01
27. 自然観察は楽しかったか	0.081	0.394	0.277	-0.009	-0.543	0.084	4.28	0.81
6. 不平不満はなかったか	0.186	0.145	0.299	0.066	-0.008	0.686	3.22	1.05
7. 疲労しなかったか	0.064	0.258	-0.054	0.071	-0.092	0.584	2.75	1.09
30. 担当プログラムに不安なところはなかったか	0.410	0.101	0.164	0.057	-0.336	0.503	3.53	1.19
29. 参加者を平等に取り扱うことはできたか	0.454	0.190	0.335	0.138	-0.382	0.391	4.03	0.79
8. 自分の意見が友人に理解されたか	0.393	0.343	0.301	0.168	0.281	0.382	3.49	0.95
42. 睡眠は十分だったか	0.026	0.343	0.243	0.301	-0.092	0.305	4.11	1.03
36. ハンドクラフトは楽しかったか	0.277	0.284	0.343	0.011	-0.091	0.196	4.03	1.05
13. 食べ物について好き嫌いはなかったか	0.379	0.285	-0.009	0.120	-0.495	0.168	4.15	1.10
28. 協同精神の発揮はできたか	0.483	0.330	0.228	0.236	-0.365	0.167	4.12	0.77
44. 意地悪をしなかったか	0.332	0.290	0.298	0.314	-0.209	0.137	4.27	0.91
45. キャンプソングは楽しかったか	0.294	0.445	0.268	0.143	-0.044	0.086	4.13	0.96
35. 共同生活者や友人の健康に気を配れたか	0.398	0.491	0.428	0.316	-0.147	0.080	4.21	0.91
41. よい習慣はついたか	0.443	0.470	0.442	0.159	-0.147	0.079	4.23	0.84
17. ゲームやスポーツは楽しかったか	0.224	0.466	0.070	0.431	-0.259	-0.036	4.64	0.60
32. 恥ずかしくなかったか	0.281	0.050	0.346	0.450	-0.327	-0.049	4.23	0.87
19. 食事はよく食べられたか	0.229	0.366	0.078	0.417	-0.363	-0.086	4.56	0.75
2乗和	8.724	8.142	4.157	3.379	2.555	2.445		
寄与率(%)	17.45	16.28	8.31	6.76	5.11	4.89		

がり、総合すると、5日間の実習をとおして嫌なことがおこらず安心して過ごすことができた様子がうかがえた。したがって、「心身の安定」と命名した。

第6因子は、6.「不平不満はなかったか」、7.「疲労しなかったか」、30.「担当プログラムに不安なところはなかったか」などの項目の因子負荷量大きい。実習中に疲労や不安・不平不満を感じるのが少なかった様子がうかがえる。よって、「実習の適切さ」と命名した。

今回の因子分析結果からは、キャンプ実習における学生の満足感・達成感を構成する要因として、「義務や責任の遂行」「交流と自己の満足感」「公平と民主」「自己の健康状態」「心身の安定」「実習の適切さ」の6つが確認された。昨年抽出された「安定と安心」「交流と相互指導」「積極性と達成欲」「触発と参加意欲」「健康状態」「集団生活への適応」の6要因と比較し、実習の成否および今後の研究のポイントをにぎる要因は何であるかを再考すると、「民主・公平のものと義務や責任の遂行」「心身の安定と安心に通じる実習の適切さ」「交流と相互指導の機会」「積極性と達成欲の増幅」「参加意欲の向上と自己の満足感」であることが予測された。

5. 自然・野外活動に対する意識変化

岸ら¹⁰⁾が作製した「自然活動実習アンケート」を本年も実施し、実習前後の回答傾向の違いについて検討した(Table 11.)。

Table 11. 自然や野外活動に対する意識の変化

N=107

項 目	実習前		実習後		T	P
	Mean	S.D.	Mean	S.D.		
《自然について》						
1. 自然の中では気持ちが安らぐ	4.12	0.88	4.31	0.91	-2.169	*
2. 自然の中では楽しい気持ちになる	4.00	0.92	4.23	0.92	-2.762	**
3. 自然の中は心地よい	4.15	0.89	4.36	0.86	-2.426	**
4. 自然は変化に富み魅力的だ	3.89	0.88	4.23	0.91	-3.679	***
5. 自然は人間の力を超えた偉大なものだ	4.26	0.87	4.44	0.81	-1.954	*
6. 自然は優しい	3.60	1.03	3.93	1.05	-3.387	***
7. 自然は調和的だ	3.73	0.94	4.08	0.97	-3.700	***
8. 自然はなくてはならない大切なものだ	4.63	0.62	4.67	0.63	-0.821	
9. 自然を積極的に守っていききたい	4.39	0.72	4.55	0.76	-2.216	*
10. できるだけ自然と接する機会を持つようにしたい	4.30	0.77	4.44	0.81	-1.945	*
《野外活動について》(野外活動は、)						
11. 心や身体の緊張をほぐしてくれる	3.67	1.00	3.98	1.05	-3.092	**
12. 未知の体験を味わう喜びや楽しみが多い	3.88	0.90	4.24	0.96	-3.829	***
13. 他人と心を通わす良い機会だ	4.04	0.82	4.31	0.95	-2.991	**
14. 自主的に考え積極的に活動する意欲をかきたてる	3.85	0.91	4.29	0.95	-5.155	***
15. チャレンジ精神やたくましい精神力を養うことができる	3.96	0.88	4.40	0.83	-5.034	***
16. 助け合い、協力し合う態度を身につけさせてくれる	4.19	0.80	4.41	0.82	-2.597	**
17. 深い感動を与えてくれる	3.82	0.89	4.20	0.98	-3.778	***
18. 創造性に富んでいる	3.80	0.77	4.25	0.86	-5.691	***
19. 規律のある生活態度を身につけさせてくれる	3.80	0.83	4.36	0.88	-6.662	***
20. 自分自身を見つめ直すよい機会だ	3.78	0.85	4.34	0.93	-6.502	***
《共同活動について》(他者との協同活動は、)						
21. よろこびや楽しみを与えてくれる	4.09	0.91	4.28	0.88	-2.310	*
22. 安心感を与えてくれる	3.64	0.99	4.00	0.98	-3.792	***
23. 大きいことを成し遂げさせてくれる	4.07	0.82	4.36	0.89	-3.741	***
24. いろいろな知識や技術を得させてくれる	4.02	0.82	4.40	0.78	-4.833	***
25. 自分の力を引き出してくれる	3.82	0.86	4.10	0.96	-2.754	**
26. いろいろな考え方を学ばせてくれる	4.11	0.80	4.38	0.86	-3.023	**
27. 自分の責任や役割を自覚させてくれる	4.21	0.79	4.37	0.83	-1.843	*
28. 他者の存在のありがたみを感じさせてくれる	4.09	0.82	4.39	0.84	-3.426	***
29. ルールやマナーの大切さを実感させてくれる	4.03	0.81	4.40	0.83	-4.478	***
30. 互いの立場の理解を促してくれる	4.00	0.84	4.33	0.90	-3.766	***

*:P<0.05 ** :P<0.01 ***:P<0.001

結果、30項目全ての平均値が向上しており、《自然について》の質問項目では10項目中9項目に、《野外活動について》の質問項目では10項目中10項目に、《共同活動について》の質問項目でも10項目中10項目に、有意な差を持った向上傾向がうかがわれた。

《野外活動について》の各項目の回答傾向から、野外活動の仕方がより自主的で積極的な方向へ変化していることが予測されること、また、《共同活動について》の各項目の回答傾向からは、自分がおかれた立場の理解や態度の変化に好影響を及ぼしていることが予測されることは、キャンプ実習自体の効果として昨年すでに明らかにしたことと同様と判断される。

しかし、《自然について》の各項目の回答傾向からは、昨年とは大きく異なる回答傾向が示された。「自然の中では気持ちが安らぐ」「自然の中は心地よい」「自然は優しい」「自然はなくてはならない大切なものだ」の4項目については、昨年は実習後に平均値が低下傾向を示したが、今年は全て向上傾向に変化し、また、「自然の中では楽しい気持ちになる」「自然の中は心地よい」「自然は変化に富み魅力的だ」「自然は優しい」「自然は調和的だ」の5項目については、統計学的に極めて有意な差を持った向上傾向に変化していることが明らかとなった。昨年は二つの解釈を示し判定の難しさを指摘したが、今年に限っては、自然というものの見方自体に好意的な変化が起こっており、「本実習のスタイルでは自然に対する理解や好意に関する面への効用は期待できない」とする見解は少なくとも否定されたと判断する。

まとめ

研究目的に、養成課程に存在する組織、指導者、プログラム、施設・設備、実習生に関わる質的向上の問題解決を置き、継続研究を予定した。

本学科に最も適した形の①診断的評価方法、②形成的評価方法、③総合的評価方法の創出のため、第二段階となる今回は、2ヶ年の基礎的資料収集による比較検討を実施した。最大の目標は、2ヶ年の実習間の最大公約数の解明である。結果から以下のことを指摘し、まとめとする。

1. 今年の参加学生も、経費が安価であることを第一条件に実習選択をし、単位取得と基本的体験を参加目標に、自然豊富な環境下でしか体験できない活動をとおして、友人と時や楽しさを共有したいという傾向がうかがわれた。強い達成欲や技術習得欲は感じられず、2ヶ年を通じほぼ同様の回答傾向が得られた。達成レベルの高い実習展開を認識させる事前教育の必要性が、両年ともに指摘された。
2. 少なくとも1人2~3回程度のキャンプ経験があり、野外調理に必要な基礎技術は半数以上が体得していると2ヶ年ともに判断できた。また、個人準備・協同準備に際しての積極性、オリエンテーションや実習要項の有効作用、知識・技術や役割・研究などに関する事前の学習や準備の不足、環境適応能力の一律性、実習直前の期待度の高さなどが昨年同様に観察された。反面、両年ともにキャンプに対する知識・技術や実習における役割・研究などに関する学習不足や準備不足は、否めない事実であることが判明した。事前学習に関する方法の再考と時間の確保が急務な課題と指摘する。
3. 自分自身の実行力と指導力に関する自己評価では、昨年と比較して平均値に向上傾向が認められるが、いずれに関しても得手不得手の順位に大きな差はないことが判明した。生活指導を行う班担当インストラクター程度の活動は可能であるが、各プログラムを主任となって運営・指導していけるほどの実行力・指導力を持つまでには至っていない。体験だけではなかなか得られない知識や自信を如何に向上させることができるかが、現キャンプ実習の課題であると今年も指摘された。
4. 満足感・達成感を構成する要因について因子分析を行なった結果、「義務や責任の遂行」「交流と自己の満足感」「公平と民主」「自己の健康状態」「心身の安定」「実習の適切さ」6つの要因を抽出することができた。昨年抽出された6要因と比較し、実習の成否および今後の研究の鍵となる要因を「民主・公平のものと義務や責任の遂行」「心身の安定と安心に通じる実習の適切さ」「交流と相互指導の機会」「積極性と達成欲の増幅」「参加意欲の向上と自己の満足感」と予測した。
5. 《野外活動について》は、野外活動の仕方がより自主的で積極的な方向へ変化していること、《共同活動について》は、自分がおかれた立場の理解や態度の変化に好影響を及ぼしていることが予測さ

れ、昨年同様にキャンプ実習自体の効果と判断された。《自然について》の各項目の回答傾向からは、「安らぎ」「楽しさ」「心地よさ」「魅力的」「優しさ」「調和的」「大切さ」に関連する項目に向上傾向が認められ、昨年の「本実習のスタイルでは自然に対する理解や好意に関する面への効用は期待できない」とする一見解は、否定された。

文 献

- 1) 中村哲士・保井俊英・會田 宏・小柳好生・田中繁宏・永戸久美・四元美帆・野老 稔，武庫川女子大学紀要，52，66(2004)
- 2) 前掲 1)，66(2004)
- 3) 前掲 1)，66(2004)
- 4) 前掲 1)，66-67(2004)
- 5) 前掲 1)，67(2004)
- 6) 前掲 1)，67(2004)
- 7) 前掲 1)，68(2004)
- 8) 松田 稔，ザ・キャンパーその理論と実際一，創元社，146-152(1981)
- 9) 前掲 1)，71-72(2004)
- 10) 岸 植夫，自然活動入門一教養としてのアウトドア一，アイオーエム，128-131(1992)